

史料室だより No.11

東洋英和女学院史料室委員会
発行 1981年3月10日

20 数年前のことを思いつつ

高千穂商科大学学長 関 根 文之助
元 本学保育科長

わたしが、東洋英和女学院短期大学に、お世話になったのは、昭和30年4月からである。

当時は、木造の校舎だったが、まわりの木木、花ばなの美しさと、まことによくマッチしていて、「学園」と呼ぶに、ふさわしいたずまいであった。

短期大学として、保育・英文の両科がそろい、これから、いろいろな面での、ととのいをしていくべき、きわめてたいせつなときに、多少でも、ご用に当たることができ得たのは、いまでも、忘れることのできない「なつかしさ」とも言うべきものを感じさせられるのである。

教科課程、教員組織、事務組織、管理体制、各種委員会、教授会等、そして、対外的折衝と、いろいろなことがらがあったが、それらが、教職員各位の協力のもと、順序よく運ばれ、進めていくことができたのは、大きな感謝であったと、いま、あらためて、当時を思い起こしているのである。

ちょうど、新しい校舎を建築するということになり、長野院長のご指導により、関係者一同が、まったく思いをひとつにし、心を合わせて、熱心に励み、まことにユニークな校舎を見ることができた喜びは、ついこのあいだのような気がするのである。

英文科においては松尾芳子教授が、保育科においては、帰国されることになったミス・ハミルトンのあとを、まったく思いがけず、わたしが、その任を負うことになり、伝統ある保育科に対する責任の重さを覚えたのであった。



1968年にたてる

保育科の将来を考えると、幼稚園教諭の資格だけでなく、保育園保母の資格を、合わせ持っていることも、たいせつなことと思ひ、そのために、及ばずながら、努力することを得、その道を開拓することができたのであるが、このためには、学校とは、関係のふかい谷川貞夫教授が、講師ではあられたが、ひじょうに力を入れてくださって、ご指導をいただくことができたのは、まことにさいわいであつた。

学友会の方は、丹羽淑子教授が、学生部長として、その育成に、けんめいの努力をなされ、いよいよ、充実してきたことだった。

松尾教授は、短期大学全体のことについても、きわめて熱心に、すべての折衝に当たられ、どんなにか、大きな力と励ましをいただいたことか、心からなる謝意を表しているのである。

大学としては、なんと言つても、図書館の充実、大学のシンボルとしての意義を持つものであ

り、芝原主任司書が、そのために、努力されたのである。保育科の内容については、専門の黒田成子教授が、わたしを助けてくださって、保育科の進むべき道を示してくださったのである。

新校舎建築の際、長野院長は、いろいろなことを、具体的に教えてくださったが、のちに、わたしが、他の学校の責任を持つようになったとき、きわめて強力な基礎的なものとなったのである。

学友会・学生会の出発

元本学学生部長 丹羽淑子

創立当時の学友会の成立を中心に学生生活などについて執筆依頼を受けました。あの頃のことは不思議に記憶に鮮明に残っていますので資料はほとんど残されていないのですが学友会成立までの背景といきさつを述べてみようと思います。

保育科と英文化が共に現在の講堂の位置に建てられた二棟の木造仮校舎で短大としての歩みを始めたのは昭和29年4月のことです。私もその春英文化専任として赴任しました。両科を合わせて二百名足らず、専任教職員も十名そこそこの小さな世帯でした。大学としての組織化はまだ手づかずの状態、教職員で構成する常勤教職員会がいゆる教授会の機能を果していたと云えましょう。何もかも一からの出発で、組織化された大学から来た私は面くらうことが多かったのですが、ミス・ハミルトンを始め、先生方は話の通る、私欲のない、ユーモアと人間的魅力のある個性的な人々が多く、しかも皆が創り上げる意欲に燃えて苦勞を意としない、そんな雰囲気職場でした。むろん学生部ありません。学生指導はすべて科別に行なわれていました。それでも健康管理や就職指導や斡旋、個人的相談などはなされていて、もっぱら担任と両科の事務担当の岩佐(故)斉藤純子両氏があたっていました。所属の科に関する限り、「皆が皆を知っている」間柄でかなり行き届いた指導がなされてきました。過保護のきらいもなきにしもあらずでしたが。就職について云えば、基

督教保育者養成という保育科の教育目標は具体的で就職指導は保育科の教育の延長線上に位置づけられていました。保育科としては当然の見識と云えましょう。英文化は対照的で、英和の高等部からの進学者がほとんどで完成教育がねらいでしたから、当初は就職希望者はほとんどなく、進学希望もごくわずかでした。

このようにすべてが科単位で、小教教育の利点を生かして、うまくいっていた中で、欠けたところは学生の自治活動の育成の問題でした。就任にあたって全学の学生指導を任じられていた私は、学生の自治とクラブ活動の組織化の必要性を常勤会に訴えました。ところが学友会はすんなりと成立が認められたわけではないのです。保育科教育の遂行に学友会活動に費す時間的余裕はないという強い反論がでました。もっともな意見です。このような現実の問題を踏えて、なお学友会が必要かどうか真剣に問われたわけです。他方、私は以前から学Yを組織し、活動していた保育科の学Y委員と英文科生を交えてこの問題を時間をかけて話し合いました。そこでの結論は全学的組織がほしいということでしたが私は両科の学生の最初の出会いとその話し合いの経過をみて、学友会の存在の意味をますます確認するようになりました。

学友会の設置は認められ、その年の後期に成立の運びとなりました。最初、学友会は学生自治とクラブ活動の両面の機能をもって出発しましたが、

その後、独立し、学生会本来の役割を担うようになりました。

あれから二十七年、社会にも学校にも、学生の質や意識にも少なからぬ変動がありましたし、学

友会、学生会にも盛衰があったことですが私は今も青年期の人間教育の実習の場としてその存在の意味を高く評価しています。そして大切に育ててほしいと願うものです。

保育専攻部より短期大学となった頃

短期大学保育科第一回生 田中英子

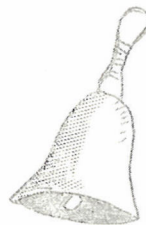
学制改革によって誕生した短期大学に、私達が第一回生として入学したのは、終戦5年目を迎えようやく復興のきざしが見えだした昭和25年4月のことでした。当時の六本木附近には今からは想像もできない戦災の跡がまだなまなましく残っていました。短大とは云いながら、独立した校舎もなく、青楓寮の3・4階を教室に、1クラス30名足らずの本当に小規模な家庭的な学校でした。入学式は青楓寮の3階にあるチャペルで行われましたが、卒業式は中高等部の大講堂で小学部から中高短大まで合同でした。体育の授業なども中高等部の運動場や体育館を拝借して受けたと思います。まだまだ物資の乏しい時でしたから、参考書なども殆んどなく、質の悪いワラ半紙にガリ版刷りの楽譜が唯一のリズム教則本でした。

施設や設備、教材等は足りないことばかりでしたが、教師陣は素晴らしい先生方に恵まれました。講師には東大教授、中央大教授、東京女子大教授等一流の先生方ばかりでした。そうそうたる講師の先生方もさることながら、宣教師の先生方の厳しい生活指導や熱心な授業は忘れることができません。専任として、又担任としていつも私達の身近におられ、遠足や一泊旅行にもご一緒下さったロック先生、スクルトン先生、ハミルトン先生。交通の便の悪かった時に、往復教時間という道程もかえりみず、情熱に溢れて教壇に立たれたキュックリヒ先生。学生全員がキリスト教保育者とし

て献身するよういつも祈っていらした先生方のお姿は今も心に深く刻まれており、卒業後30年になろうとしている現在も保育の現場にある数名の心のうちに生きつづけ支えとなっていることと思います。

授業は短大となったため、保育専攻科の時より一般教養の履修課目が多く、朝から夕方までびっしりと組まれており、勉強は大変でした。2年生になってからは実習が大きなウエイトを占めてきて、毎日午前中は各配属園で実習し、午後は学校に帰り授業を受けました。当時の実習園は東洋英和、安藤記念、霊南坂、柿ノ木坂、行人坂の五園でした。実習の疲れで午後の授業はとてもねむかったことや、座席が名簿順に定められ、先生方は座席表をもっていらして代返などとんでもなかったことなど懐かしく思い出されます。

経済的、物質的に恵まれない時代に学んだ私達でしたが、素晴らしい先生方と出逢い、信仰に根ざした多くの精神的賜物をいただき、心豊かな充実した学校生活を送ることができましたことを心より感謝しております。



カラン
カラン

木造校舎時代に授業の
始めと終りを知らせた
ベル

「懐しき我が母校」

短期大学英文科第二回生 土屋幸子

卒業以来すでに23年もの年月が経ってしまいすぎさった昔を思い出そうと努力するのですが古き良き日を記憶してた細胞があっという間に退化してしまい断片的にしか思い出せません。その心もとない記憶をたどって我が母校の思い出のいくつかを綴ってみることに致しました。

昭和30年4月英文科の1年生として入学式を迎えました。道路に面した垣根にはつるばらが咲き木造に白ペンキをぬった平屋の校舎は本当に閑静というか現在の建物からは想像もつかない質素なものでした。1年、2年各1クラスで職員室、事務所なども小じんまりしたものでした。渡り廊下の階段が現在の学生ホールのある場所まで下っていて特別教室や保育科などが下の平地にありました。当時三河台と呼ばれたロアビルの辺、又六本木もお茶をのみに入るお店もないような静かな町でした。したがって学生達も大学生になったとはいえとても純情で口紅などをつけて大人になったつもりでも先生方がごらんになるとまだまだ子供っぽい生徒ではなかったかと思います。小人数の短大ですのでビジネススクールの的なイメージの学校でした。秋になり創立記念日がやってまいり

ました。短大創立以来2年目にしてはじめて文化祭と名づけて催しを致しました。現在の「かえで祭」です。最大のイベントはバザーでした。ナボリのアイスクリーム、片倉ハドソンのパンティストッキングなど安く仕入をするために飛びまわり私なりに一生懸命努力をして商品を集めました。当時自然科学と云う科目がありその中でお料理をとっていた生徒は食堂を受持ち高校の地下にあるキャフテリアをお借りしてクラムチャウダーやおしるこを作って売上げに協力致しました。私は当時お料理の先生でいらした南波先生と前日から学校に準備のため泊り込みました。現在の高校、昔の小学部の一階に休息室がありそこに泊り、夜8時すぎ先生と二人でお腹がすいてしまったのですが正門その他入口は全部鍵がかかってしまい仕方なく窓から中庭にとび降りて六本木まで食料を仕入に参りました。文化祭の売上金がどのくらいであったかはっきりした記憶がございませんが礼拝堂の緞帳の購入にあてて下さるというお話でした。二年間の学生生活で何よりも楽しかった思い出です。無我夢中で全員の協力のもとにやりおえたこの文化祭は実に満足感のあふれるものでした。

資料に見る30年(1)

東洋英和女学院短期大学

(史料室および短大図書館所蔵資料より)

1950東洋英和女学院短期大学設置 昭和25.3.14

校舎 青楓寮3、4階

初代学長 長野 彌

宣教師 M. L. Rorke, M. F. Scruton,
F. G. Hamilton

授業風景

(写真)

- 1952 卒業証書 第1回生
- 1953 東洋英和女学院高等部英文専攻科学設置
東洋英和女学院高等部英文専攻科学則(昭和28.4.1施行)
校舎 木造校舎(進駐軍跡を使用)
(港区麻布東鳥居坂九) (写真)
- 1954 学院創立七十周年
英文科設置 昭和29年度 保育科と合併
校舎 木造校舎(講堂、料理教室等を増築)
東洋英和女学院短期大学学則(昭和29.4.1より実施する)
東洋英和女学院短期大学教員組織(英文科
行事予定(昭和29年度)
当時の教職員 (写真)
創立七十周年記念 (パンフレット)
創立七十周年記念音楽会 (プログラム)
- 1955 東洋英和女学院高等部英文専攻科廃止
昭和三十年度学暦
東洋英和女学院短期大学入学案内(昭和30年度)
入学試験問題集(昭和31年度)
短大校舎えはがき、カード
英文専攻科生 卒業記念 (写真)
- 1956 “おもいで”文集英文科第1回生卒業記念
ハミルトン先生送別会次第(4.10)
ハミルトン先生退任帰国(新聞記事、写真)
修養会 英文科2年 天城山荘(10.8-10)
(プログラム・文集・写真)
東洋英和カレッジ・デー(11.23)
短大ハイキング班(ワンゲル部の前身)
はじめての富士登山(しおり・写真)
- 1957 短期大学名簿 昭和32年度
“宗教部部報”No.1 発刊 宗教部
運動会(中高部校庭 5.25) (写真)
第2回文化祭(写真) (プログラム)
卒業修学旅行 南紀(3.2-7) (写真)
- 1958 東洋英和女学院短期大学新校舎建築起工式
順序(6.4)
短大新校舎建築募金第1年度(昭和33年度)報告
保母課程実習保育園一覧一昭和33年度一
“かえで”No.8 発刊 宗教部
かえで祭(第3回)文化祭を改称(プログラム)
- 1959 学院創立七十五周年
短大校舎完成 講堂落成3月 卒業式挙行
校舎完成4月 献堂式7月
要覧1959
時間割(英文科1年)
論叢 1号(学院)
入学記念撮影(木造校舎) (写真)
創立七十五周年記念式典次第
- 1960 入学記念撮影(新校舎) (写真)
第1回キリスト教幼児教育研究会のお知らせ(6月) (プリント)
キリスト教幼児教育研究会記録第1回(7.23)
教授会 第1回(11.7)(常勤教職員会
と並行して行う)
短大昭和36年度入学試験要項
短期大学諸規程(案) (プリント)
短大講堂使用規程 (プリント)
図書目録1960(小・中高・短大)

短大の“かえで祭”は1956年に東洋英和カレッジ・デー(11.23)としてはじまり、翌年第2回文化祭として一般にも公開した。1958年第3回から“かえで祭”と改称。第6回から開催時期を学院の創立記念日にあわせて11月3日を中心とするようになった。

史料室だより 目次 No. 1 ~ 10

- No. 1 発行 1977・7・12 中学部・高等部 中野登美子
 “史料室だより”発刊にあたって 斉藤 浩二 校章楓の虚々実々 伊勢紀美子
 史料室委員会の歩み 中野登美子 短期大学となった頃の保育科 黒田 成子
 資料の収集と整理 芝原 翠 英文専攻科のことなど 斉藤 純子
 公文書撮影記 朽木 久子 英文専攻科 島田 恭子
 資料提供のおねがい 中沢 和子 短期大学英文科一回生 岩崎 明子
 No. 2 発行 1977・12・20 短大付属かえで幼稚園の設立 飯田 泰造
 東洋英和女学院設立申請書より ① 栗原正己 昭和25年ごろの青楓寮 山崎マツノ
 マ・サ・ジュリア・カートメル Myra E. Simpson No. 8 発行 1980・1・28
 収集資料一覧I (明治・大正期) 課外授業(ピアノ科・オルガン科・バイオリン科)
 No. 3 発行 1978・3・1 ピアノ科のこと 加藤 信子
 東洋英和女学院設立申請書より ② 栗原正己 オルガン科の想い出 長倉 茂子
 第二次世界大戦下の学校 岩原さかえ 英和でバイオリンのレッスンを受けた頃 浦松ヘレン
 次の資料が集まりました。 東洋英和女学校規則(明治四十年三月改正)
 No. 4 発行 1978・9・1 東洋英和女学校規則(明治四十二年)
 第二次世界大戦下の学校 続 岩原さかえ 現在のピアノ科の教科課程
 最近収集した資料から
 No. 5 発行 1978・11・6 No. 9 発行 1980・7・14
 創立94周年記念特集号 小羊の牧場 一郊外学園一 樫村 辯市
 集団疎開地 外崎長三郎 小学部と共に25年 江良顕三郎
 守られた子どもたち 阿部 光子
 疎開生活を想う 花島 光子
 同じ釜の仲間 中川 正子
 昭和20年をかえりみて 桜井 くら
 No. 6 発行 1979・7・10 No. 10 発行 1980・11・6
 特集：学園生活の記録—明治32年～37年— 創立96周年記念特集号—青楓寮、法人本部(元
 明治30年の想いで(吉見欣子氏と委員中野登 元宣教師館)、東光会館(元幼稚園)閉館式
 美子、朽木久子との対談、および関連受贈資料) 1980・7・7
 No. 7 発行 1979・11・6 式次第
 創立95周年記念特集号 お話 院長 光明照子、 ロジャース
 創立当初より昭和初期までのころ 荒牧富士子 二番地 M. E. Matthewson
 小羊は育つ 樫村 辯市 二番地雑談 中野登美子
 あとがき 学院の短期大学も開学以来三十年の歳月が経ちました。草分当時の有様の再現を試みま
 した。今後とも教育内容、学生生活等の史料集めにご協力をお願いいたします。(藤田、芝原 短大)

10